小川未明文学館　館報

vol.19

令和６年度　特別展

髙村木綿子（ゆうこ）が描く「赤いろうそくと人魚」絵本原画展

髙村木綿子氏
上：「娘の思い」
下：「人魚の母娘」
（『赤いろうそくと人魚』より）

小川未明文学館 館報 第19号
２０２５年（令和７）５月30日発行（年刊）

目次

【寄稿】
小埜　裕二氏
「小川未明文学館
開館20周年に寄せて」　2
【報告】
文学館1年の記録（令和６年度）　4
・展覧会　6
・各種イベント・講座等　11
・その他関連事業
【小川未明文学賞】　13
【未明ボランティアネットワークだより】
「のばら」Vol.21　14
【文学館からのお知らせ】　16

小川未明文学館
新潟県上越市本城町８－30（高田図書館内）
ＴＥＬ　０２５－５２３－１０８３
ＦＡＸ　０２５－５２３－１０８６

小川未明文学館 開館20周年に寄せて

小埜　裕二
（上越教育大学教授・小川未明文学館専門指導員）

小川未明文学館が開館したのは、平成17（２００５）年10月1日である。未明の生誕年（明治15年）から数えて１２３年、没年（昭和36年）から数えて44年目にあたる。未明の郷里に文学館が出来たのは、今から思うと遅いようだが、市民の多くが文学館の設立を願い、ようやく実現にこぎつけたものである。文学館の設置場所についても種々議論されたようだが、現在の高田図書館内に独立した館を構えることで落ち着いた。高田城址公園内にある高田図書館は、利便性が高い。市町村合併をした当時の上越市は、広域的な観点から、まちづくりを展開し、重点的な投資による基盤整備の推進を図ろうとしていた。文学館の設立もその一環であった。地域のイメージアップ、観光や文化振興などが期待された。

しかしバブル景気の終焉後に開館した文学館は、先行きの不透明さから、よい条件でスタート出来たわけではない。館長は置かず、専従の学芸員や事務員もいなかった。高田図書館内の一角を使って作った即席の文学館であった。しかも館の空間の半分弱にあたる文学館ギャラリーは、貸しスペースとして市民に供せられた。未明を愛する市民の文学館設立の熱い思いが実を結び、館は出来たが、市は未明の業績を高く評価し、新しい館を建て、未明の顕彰と研究に力を注ぐところまでは踏み切れなかった。当時の未明評価や認知度から考えると、文化行政の取り組みとして、その形態が館設立の難しい条件をクリアする最善の方法であったのであろう。

小川未明文学館は今年、開館20周年を迎えた。この20年、文学館は上越市の地方財政の縮小化と向き合いながら、工夫と献身的な働きによって維持されてきた。文学館の組織体制は今も変わっていない。文学館ギャラリーも貸スペースのままである。予算措置は年ごとに厳しくなり、今の体制と予算では、館のこれ以上の事業拡大は望めない。人も財政もパンク寸前だからだ。年間３万人の入館者は、決して多い数ではないが、これ以上の入館者を求める目標を設定することも出来ない。夢のような事業展開は期待できない。リアルでシビアな運営を行うことで組織は維持される。今の活動を丁寧に続けていけば、いつか文学館の組織体制や財政基盤を安定させるチャンスがもう一度来ると信じたい。

しかし、教育という社会的行為がただ教科書の内容を教えるだけでは務まらず、教科内容に対する愛や面白さを感じていな

いと教える行為が成立しないように、未明を知り、未明文学を愛するようにならなければ、組織体制の更新や財政基盤の安定は図れまい。文化事業は、経済を第一に考える現実的視点からは切り捨てられやすい。未明文学と郷土の強固な結びつきは、われわれに、風土や自然の向こうに未明の息遣いや文化的な薫りを感じさせ、暮らしに憩いと自信を与えてくれる。宮沢賢治や泉鏡花、新美南吉や浜田広介らの文学館が、県外からも多くの人を引き寄せ、心の拠り所となってきたように、未明文学館がわれわれの生きる糧となることを文学館存立の意義として肝に銘じる必要があろう。

未明文学館の開館10周年の際は、未明の書斎が文学館内に再現、設置された。開館20周年は、予算措置がつかず、人的資源の増加も見込めず、大きな周年記念の事業は見送られた。この状況は今後も続く。文学館の機能強化や発信力強化をわれわれは望んで来たが、それは一種の甘えであった。文学館に未明顕彰のすべてを委ね、なんでもやってもらえると思ってきた。今後も小川未明文学館が未明顕彰の中心であることに変わりはない。だが今後の文学館の運営は、官民学の連携の中で支えられ成長していく必要がある。事業の多くは市民が行い、財源の一部を市の財政以外に求め、情報発信も別の独自展開を考える必要がある。

３年前、令和４年の小川未明生誕１４０周年の折りは、市民グループが中心になって官民連携のなか、未明の顕彰活動を行った。約30の事業を立ち上げ、予算措置を独自で行い、海外からの研究者をまねき、フォーラムやシンポジウムを行った。翌年の令和５年には市民グループがこれも官民連携の中で「日本近代童話の父 小川未明顕彰会」を作った。これは前身である「小川未明連絡会議」の情報共有を主とする活動から、連携による事業をより大きな力に集約する活動に転換するために作られた組織である。この組織が文学館の脇を固め、事業展開を進めていく。ボランティアを含めた文学館のサポーター組織も作りたい。

10年後の開館30周年の前に、未明生誕１５０周年が来る。それに向けて毎年、市民レベルの顕彰事業を積み上げていく。上越市には未明の生家である幸町、未明が青年期を過ごした春日山神社、未明文学館の３つの拠点がある。幸町に生家を再建すれば、未明顕彰の３拠点が出来る。そのトライアングルの中から、情報発信や情報提供を世界中に行っていく。先日、小川未明研究会が作る「小川未明の窓～イベント・研究ＨＰ～」に中国人未明研究者の高鵬飛（ガオポンフェ）氏から未明童話の中国語訳約30編が送られてきたので掲載させてもらった。韓国語訳も準備中だ。文学館開館20周年が、未明顕彰の礎となる連携体制を作ったと後年言われるような、さまざまな取り組みを講じていきたい。

文学館1年の記録

令和6年度（2024年度）は、34320人の方からご来場いただきました。

【展覧会】

令和6年度は、特別展を2回、企画展を1回、特集展示を2回開催しました。

特別展「第32回小川未明文学賞展」

〈会期〉令和6年4月27日（土）
～5月26日（日）　25日間
〈会場〉小川未明文学館 市民ギャラリー

第32回小川未明文学賞の応募作品553編の中から大賞・優秀賞に選ばれた受賞者の喜びの声やその作品の講評、選考過程などを紹介しました。

また、東京の学研ビルで開催された贈呈式の様子、これまでの大賞受賞者とその作品のほか、書籍化された第31回小川未明文学賞大賞受賞作品（2023年）、有本綾氏著『今日もピアノ・ピアーノ』の書籍表紙パネルや校正原稿（㈱Gakken提供）などを紹介しました。来場者数1584人。

特別展「高村木綿子が描く「赤いろうそくと人魚」絵本原画展」

〈会期〉令和6年10月5日（土）
～12月15日（日）60日間
〈会場〉小川未明文学館　市民ギャラリー

特別展チラシ

小川未明の1200編以上の童話の中で、今も多くの人びとに愛され続けている「赤いろうそくと人魚」。この作品は、大正10（1921）年に東京朝日新聞で発表されてから100年以上にわたり未明の代表作として知られ、時代を越えて多くの画家がその情景を描いてきました。

童話「赤いろうそくと人魚」は、北の海にすむ人魚の母親が、人間のやさしさを信じて子どもを人間に託す話です。本展では、日本画家の高村木綿子氏が絵本で初めて手がけた『赤いろうそくと人魚』（架空社、2013年）の原画28点と下絵3点、当館所蔵資料の中から「赤い蠟燭（ろうそく）と人魚」の収録誌20冊を展示しました。来場者数7041人。

●高村木綿子氏プロフィール
東京都出身、群馬県在住。武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業。定期的に個展・グループ展を開催。壁画やイラストの仕事を多数行う。画家・堀越千秋氏の舞台美術制作等に長年携わる。

企画展「小川未明フェスティバル・童話感想文コンクール受賞展」

〈会期〉令和7年1月24日（金）
～3月2日（日）31日間
〈会場〉小川未明文学館　市民ギャラリー

令和6年12月1日に上越文化会館で開催された「小川未明フェスティバル２０２４」の様子を写真パネルで展示しました。また、未明童話「青いランプ」を課題図書とした「小川未明童話感想文コンクール」の受賞作文や、本コンクールの審査委員である小埜裕二氏（上越教育大学教授）の講評を紹介しました。来場者数２６３６人。

特集展示１「新収蔵品展―令和5年度収集資料―」

〈会期〉令和6年6月21日（金）～12月18日（水）
〈会場〉小川未明文学館　常設展示場

小川未明文学館では、未明に関する様々な資料を収集しており、これらの資料を活用して特集展示を開催しています。

特集展示１「新収蔵品展」では、令和5年度に新たに収集した資料の中から、未明の小説・感想が発表された雑誌や初出童話が掲載された絵雑誌などを展示しました。

〈主な展示資料〉
・小説「森―叙景小品の一―」（『学生』大正元年10月）
・童話「燕と紅雀」（『民政』昭和8年7月）
・童話「深山の秋」（『真理』昭和10年12月）
・感想「湯屋」（『月刊随筆　博浪沙』昭和14年5月）
・童話「角笛吹く子」（『童話』大正10年3月）
・童話「アマリリスト駱駝（らくだ）」（『コドモノクニ』昭和8年4月）
・童話「屋根へアガッタ羽根」（『コドモノクニ』昭和9年1月）
・童話「アカイチャウチンノ話」（『コドモノクニ』昭和9年2月）
・童話「風ノ子トオ雛様」（『コドモノクニ』昭和9年3月）ほか

特集展示２「１００年前の未明―１９２５年―」

〈会期〉令和6年12月20日（金）
～令和7年6月18日（水）
〈会場〉小川未明文学館　常設展示場

特集展示２では、１００年前となる大正14（１９２５）年の未明の作品や活動に焦点を当てました。このころの未明は、日本小説家協会の会員となり、社会主義的小説を執筆する一方、童話「月と海豹（あざらし）」「沙漠（さばく）の町とサフラン酒」など、今日まで知られている多くの名作を発表しました。さらに、同年11月から翌年にかけて未明作品の集大成といえる『小川未明選集』を刊行し、精力的な一年を過ごしました。

〈主な展示資料〉
・小説集『堤防を突破する浪』（大正15年　創生堂）
・『小川未明選集』（大正14～15年　未明選集刊行会）
・童話集『海から来た使ひ』（大正15年　創生堂）
・童話「月と海豹」（『愛の風』大正14年4月）ほか

【各種イベント・講座等】

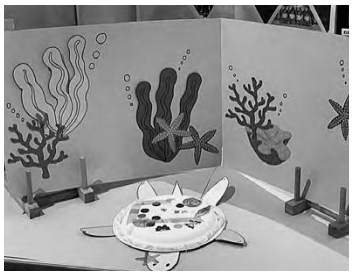
小川未明文学館こども祭

〈日時〉春：令和6年5月11日（土）
午前10時～午後4時
秋：令和6年10月27日（日）
午前10時～午後3時
〈会場〉小川未明文学館 出会いのロビーほか

✍子どもたちから未明童話や文学館に親しんでもらうため、「小川未明文学館こども祭」を春と秋の年2回開催しました。

春は、未明童話「島の暮れ方の話」が『赤い魚』に初収録されて100年を迎えることから、同作をテーマにした「ちょうちょモビール」などの工作やクイズを行いました。また、未明のトレードマークであるハンチング帽に丸めがねを身に着け、羽織姿で未明になりきる「小川未明になりきろう」も人気でした。当日は高田図書館こども祭も開催していたため、大勢の子どもたちが来場しました。参加者数延べ200人。

秋は、特別展「高村木綿子が描く「赤いろうそくと人魚」絵本原画展」の開催にあわせて、人魚が暮らす海の世界をイメージした「紙皿でかめさんをつくろう」、「紙コップで海のなかまをつくろう」、「おさかなしおり」などの工作を行いました。参加者数延べ40人。



童話創作講座

〈日時〉令和6年5月26日（日）、6月23日（日）、7月28日(日) いずれも午後2時～4時
〈会場〉高田図書館 第1会議室

✍牧野節子氏（児童文学作家）を講師にお招きし、短編童話の書き方を学ぶ初心者向けの童話創作講座を開催しました。

講座では、童話の基礎と基本的な書き方や創作技術の高め方について、具体例を基に学びを深めたあと、実際に受講者の皆さんから短編童話を創作してもらいました。この作品を講師から丁寧に講評いただいたり、受講者同士でお互いの作品について意見交換を行ったりして、今後の創作の参考にしました。受講者数15人。

朗読研修会

〈日時〉令和6年6月15日（土）、6月22日（土）、7月6日（土）午後2時～4時、最終日は午後4時30分まで

〈会場〉高田城址公園オーレンプラザ研修室・会議室

橘由貴氏（朗読療法士・ヴォイスアーティスト）を講師にお招きし、朗読研修会を行いました。

はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習の大切さを学び、「聴き手の心に届く朗読をするには」という講義に耳を傾けました。次に発声練習や開口訓練を行い、その後、未明童話「青いランプ」（昭和5年）を題材にした実践的な朗読で、講師から個々に指導を受けました。また、講師の朗読を聴き、受講者のスキルアップの参考にしました。受講者数22人。

文学館講座

小川未明やその作品について学ぶ講座を全3回開催しました。受講者数は延べ107人。

第1回文学館講座

〈講師〉小埜裕二氏（上越教育大学教授・小川未明文学館専門指導員）

〈演題〉未明童話「赤い船のお客」を読む

〈日時〉令和6年6月9日(日) 午後2時～3時30分

〈会場〉町家交流館高田小町　多目的ホール

大正13（1924）年に発表された「赤い船のお客」を読み解き、物語の構成や赤い船の行方、未明童話における位置付けについてお話しいただきました。

物語の構成については、「赤い船のお客」を構成する6つの要素について一つ一つ解説いただき、普通のハッピーエンドの童話では終わらない未明童話の面白さや、複数回の話の展開により「少年の孤独を癒す笛の話」「不思議な笛の話」「教訓を与える笛の話」の面を持つことなどについてご説明いただきました。

また、赤い船の行方については、赤い船が登場する「黒い塔」や「赤い船と燕」など、他の未明童話を紹介いただき、それぞれの物語における赤い船の役割をお話しいただいたほか、未明童話における位置付けについては、当時の時代背景や未明自身が置かれた状況を踏まえながら、「赤い船のお客」は空想が現実を変える力をもつことを述べたものであり、新しい世界の拡張あるいは可能性の拡大をうたったものであるとお話しいただきました。受講者数33人。

第2回文学館講座

〈講師〉富塚昌輝氏（中央大学文学部准教授）
〈演題〉人・文学・地域
〈日時〉令和6年8月17日（土）午後2時～3時30分
〈会場〉高田城址公園オーレンプラザ研修室・会議室

✍徳島県で農業を営みながら小説を書き続けた悦田喜和雄をとりあげ、地域の中で「文学する」ことの意味についてお話しいただきました。

前半は、悦田は若いころに中央文壇で活躍するチャンスを得ながら、様々な状況の中でその道を断念し、それでも地域の中で働きながら文学を書き続け、生きる中で文学を書くということに意志的に取り組んでいたという、悦田の人生と文学の関わりについてご説明いただきました。

後半は、悦田の小説や書簡を読み解き、文学のモチーフやテーマである「淋しさ」について、表現の特徴などを解説していただきました。また、「文学する」ことの意味や人生について考え、地域の中で「文学する」こととは、地域・人生を複線的・複層的に想像・創造すること、地域・人生に「思う」時間・場を組みこむこと、情理を尽くしたコミュニケーション、過去の上に立ち未来へ呼びかけること、日常的・持続的な文学・文化活動であるとお話しいただきました。受講者数33人。

第3回文学館講座

〈講師〉片野修氏（佐久大学非常勤講師）
〈演題〉文学と生物学における動物のとらえ方
〈日時〉令和6年10月27日（日）午後3時～4時30分
〈会場〉小川未明文学館　市民ギャラリー

✍小川未明と宮沢賢治の作品に登場する動物や植物の描き方を、生物学や動物行動学の視点からお話しいただきました。

はじめに文学と生物学の関係について、人間も生物であり、動植物と同様に個体群を形成して群集の一員になるとお話しされ、生物学の歴史や生物の見方、進化論の現在についてご説明いただきました。

また、未明と賢治の作品に登場する生物は、共通して動物の福祉・個性を重んじる傾向にあり、特に未明は動物についての作品が多く、「駒鳥と酒」や「月夜と眼鏡」のように人間と共生・協調する作品もあれば、「赤い蠟燭と人魚」や「狼と人」のように人間が悪く動物が正しいという作品もあり、多様性に富んでいるとご説明いただきました。このほか、ご自身の研究も踏まえた、生物群集における直接効果と間接効果についても解説していただき、未明童話は間接効果に満ちており、ストーリーが予定調和にならず、新鮮な感動をもたらしているとお話しいただきました。受講者41名。

特別展記念講演会

特別展「高村木綿子が描く「赤いろうそくと人魚」絵本原画展」の関連イベントとして、特別展記念講演会を開催しました。

〈講師〉小埜裕二氏（上越教育大学教授・小川未明文学館専門指導員）

〈演題〉「赤い蠟燭（ろうそく）と人魚」の世界

〈日時〉令和6年11月17日（日）午後3時～4時30分

〈会場〉小川未明文学館　市民ギャラリー

✍最初に上越市内の人魚像や人魚塚伝説に触れたあと、「赤い蠟燭と人魚」とアンデルセンの「人魚姫」との違いや、未明の生い立ちとの関連性についてご説明いただきました。

「赤い蠟燭と人魚」は、人間の欲の醜さと人魚の愛の美しさが対比で表されており、人間に対して抱いた人魚の信頼が裏切られ、深い愛ゆえに娘を手放した人魚の母の失望・怒りは大きく、老夫婦の豹変ぶりは金の力で豹変する人間の愚かさや弱さを未明が示したかったためであるとお話しいただきました。そして、善と悪の特性を人魚と人間に振り分け、蠟燭屋の老夫婦に善と悪の両極を渡り歩かせることで人魚の愛の価値に気づかせる名作であるが、村の破滅に当時の社会体制を覆すイメージを読み込むなら、この時期の未明は社会的弱者を異世界へ連れやる救いに限界を感じており、社会変革による救いを考えていたとお話しいただきました。

さらに、人魚の娘が大事に育てられていたときの絵蠟燭の不思議な力と、娘が人間の裏切りにあった後の赤い蠟燭の不思議な力の対比、災難がふりかからないことと、災難がふりかかることの対比が、海の神様の喜びと怒り、幸福と不幸、生と死の対比と言い換えることができることや、童話の構成については会話が多く、安定したスピードを支えているとし、冒頭部のゆっくりとした情景法的な描写と、結末部の坦々とした要約法の説明が対比で見事に表されているとご説明いただきました。

この童話では、人魚と人間、愛と欲、信頼と不実、陸と海、生と死、本当の神と偽りの神といった対比関係が実に鮮やかであり、未明も意識して作品を生み出していたことなどをお話しいただきました。受講者37人。

文学館おはなし会

〈日時〉毎月第2・4日曜日　午後2時～

〈会場〉小川未明文学館　ビッグブックシアター

✍未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力により、未明童話を中心としたおはなし会を22回（大雪のため1回中止）開催しました。参加者数延べ183人。

出張おはなし会

✍未明童話に出会う機会をより多くの子どもたちに提供するため、未明ボランティアネットワークの協力により、市内の小学校や放課後児童クラブに出向いて、おはなし会を開催しました。

令和6年度は、市内小学校13校18回（696人）、放課後児童クラブ6か所（201人）を訪問しました。

未明童話のぬり絵

✍小川未明文学館の「出会いのロビー」では、いつでも数種類の未明童話のぬり絵をご用意しています。小さなお子さんから、高校生・大人の方まで、大勢の方からお楽しみいただいています。完成したぬり絵は、ロビー掲示板に展示しています。

こどもプログラム　未明童話と親しもう
―こどもたちに届けたい未明のメッセージ―

✍未明童話といえば「赤い蝋燭（ろうそく）と人魚」や「月夜と眼鏡（めがね）」、「野薔薇（のばら）」などが有名ですが、このほかにも素晴らしい童話が数多くあります。これらの童話を子どもたちに読み親しんでもらうため、月替わりで未明童話を冊子にして無償配布しています。

令和6年度から、低学年用（幼児～小学2年生）と中学年用（小学3～4年生）の2種類を作成し、たくさんの子どもたちからより長く未明童話を読んでもらえるように工夫しました。参加者には「おはなしカード」を配布し、集めたシール数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。配布数延べ1075冊。

●配布童話（低学年用）

・4月「かにと子すずめ」（『未明カタカナ童話読本』昭和11年3月）
・5月「鯉のぼりと鶏」（『コドモアサヒ』大正13年5月）
・6月「たなごと年ちゃん」（『未明カタカナ童話読本』昭和11年3月）
・7月「花火の音」（『幼年の友』昭和9年7月）
・8月「つめたいメロン」（『セウガク一年生』増刊昭和12年8月）
・9月「からすねことペルシャねこ」（『カタカナ童話集』昭和14年10月）
・10月「ひとりぼっちの少年」（『カタカナ童話集』昭和14年10月）
・11月「子猿と母猿」（『愛育』昭和11年11月）
・12月「雪と二羽のからす」（『家の光』昭和8年12月）
・1月「武ちゃんのしっぱい」（『セウガク一年生』増刊　昭和12年1月）
・2月「冬の休日」（『スキート』昭和7年1月）
・3月「白い雲とお人形」（『小豚の旅』昭和10年5月）

●配布童話（中学年用）

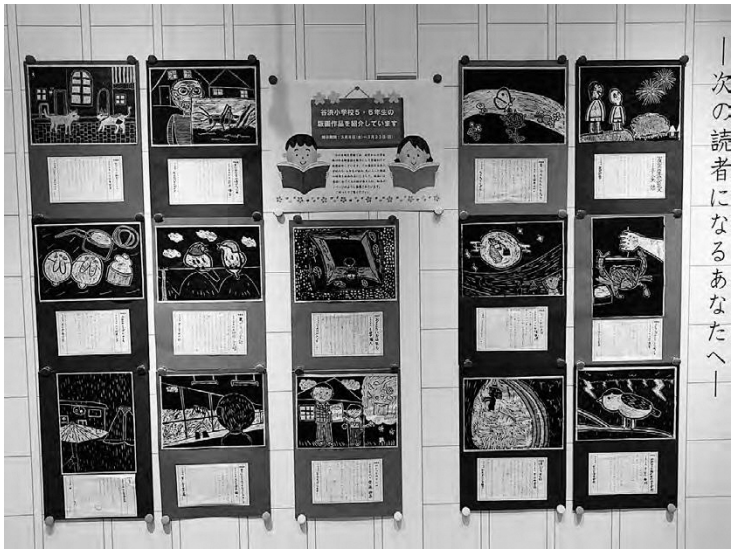
・4月「青葉の下」（『せうがく三年生』昭和13年5月）
・5月「夏みかんと白さとう」（『コドモアサヒ』昭和11年6月）
・6月「ひばりのおじさん」（『せうがく三年生』昭和13年6月）
・7月「風船虫」（『児童文学』昭和11年9月）
・8月「玉虫のおばさん」（『せうがく三年生』昭和11年11月）
・9月「海へ帰るおじさん」（『せうがく三年生』昭和13年9月）
・10月「星の降る夜」（『せうがく三年生』昭和14年2月）
・11月「ハーモニカを吹くと」（『コドモノクニ』昭和8年10月）
・12月「山へ雪が来ました」（『小学四年生』昭和13年11月）
・1月「お面とりんご」（『未明ひらかな童話読本』昭和11年3月）
・2月「あや子さんの絵」（『コドモノクニ』昭和9年12月）
・3月「雪消え近く」（『小学四年生』昭和14年3月）

谷浜小学校版画作品の紹介

〈期間〉令和7年3月8日（土）～3月23日（日）
〈会場〉小川未明文学館「出会いのロビー」

✍「こどもプログラム　未明童話と親しもう」で配布している未明童話を上越市立谷浜小学校の5、6年生が読み、気に入った童話の情景を版画作品にしてくれました。版画には童話に出てくるお話が添えられ、絵本の1ページのように表現されていました。

―次の読者になるあなたへ―



季節のワークショップ

〈期間〉七夕ワークショップ：
令和6年6月21日（金）～7月15日（月祝）
クリスマスワークショップ：
令和6年11月23日（土）～12月25日（水）
〈会場〉小川未明文学館「出会いのロビー」

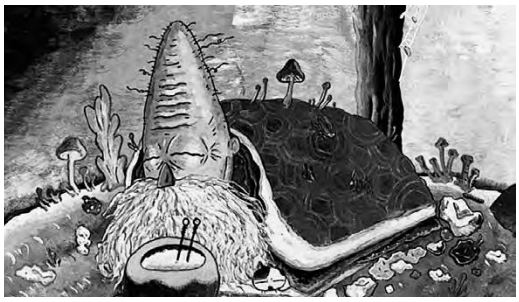
✍七夕とクリスマスの季節にあわせて、参加者が自分の願い事を書き記すワークショップを行いました。子どもから大人まで、たくさんの方が参加してくださいました。参加者数延べ301人。

七夕ワークショップの様子

未明童話アニメーション上映

〈期間〉令和6年12月20日（金）～
〈会場〉小川未明文学館ビッグブックシアター

✍有限会社スタジオトゥインクル様から映像提供を受けた未明童話「ものぐさじじいの来世」（絵・高岡洋介氏）、「眠い町」（絵・堀越千秋氏）、「月とあざらし」（絵・古志野実氏）、「負傷した線路と月」（絵・古志野実氏）、「島の暮れ方の話」（人形制作・浅野優子氏）のアニメーションを館内でご覧いただけるようになりました。ご希望の方は受付へお声がけください。



「ものぐさじじいの来世」

「眠い町」

【その他関連事業】未明生誕祭

〈日時〉令和6年4月7日（日）午前10時～正午
令和7年3月30日（日）午前10時～正午
〈会場〉未明生誕の地碑前、町家交流館高田小町

✍小川未明は明治15（1882）年4月7日に新潟県中頸城郡高城村大字五分一（現上越市幸町）に生まれました。令和6年は未明生誕142年、令和7年は143年を迎えることから、上越市幸町の「未明生誕の地」碑前で生誕祭を行いました。式典後、会場を町家交流館高田小町に移して、記念スピーチ・記念講演等を行いました。

○令和6年
・記念スピーチ：山田結菜さん（令和5年度未明童話作文コンクール大賞）、山田理紗さん（令和5年度未明童話作文コンクール優秀賞）、岡本フミ氏（未明ボランティアネットワーク会長）
・記念講演：小埜裕二氏（上越教育大学教授・小川未明顕彰会会長）
・チャリティーバザー：令和6年度能登半島地震支援

○令和7年
・記念スピーチ：大谷日香理さん（令和6年度未明童話作文コンクール大賞）、茂野雅未さん（令和6年度未明童話作文コンクール優秀賞）、宮﨑俊英氏（高田文化協会事務局長）
・記念講演：小埜裕二氏（上越教育大学教授・小川未明顕彰会会長）

未明研究第一人者・小埜裕二教授の解説で巡る「小川未明ゆかりの地ツアー」

〈日時〉令和6年10月16日（水）
午前9時20分～午後4時20分
〈主催〉頸城自動車株式会社
〈共催〉日本近代童話の父　小川未明顕彰会
〈主な立寄り先〉
小川未明文学館、未明生誕の地、宇喜世（昼食）、春日山神社、埋蔵文化財センター、レストランエリス（喫茶）

✍頸城自動車㈱様の主催で、上越教育大学の小埜裕二教授とともに、上越市内の未明ゆかりの地を巡るバスツアーが行われました。

まず、小川未明文学館で小埜教授から未明の生い立ちや作品について詳しくお話しをいただいた後、「未明生誕の地」（幸町）に移動して幼少期ゆかりの場所を散策しました。春日山神社では、風間宮司から春日山時代の未明についてお話しいただき、境内の未明詩碑「雲のごとく」や未明記念館をご案内いただきました。埋蔵文化財センターでは企画展「越後上越　謙信公と春日山城展」を見学し、レストランエリス（旧師団長官舎）では未明童話「飴チョコの天使」にちなんだオリジナルスイーツをいただきました。参加者数23人。

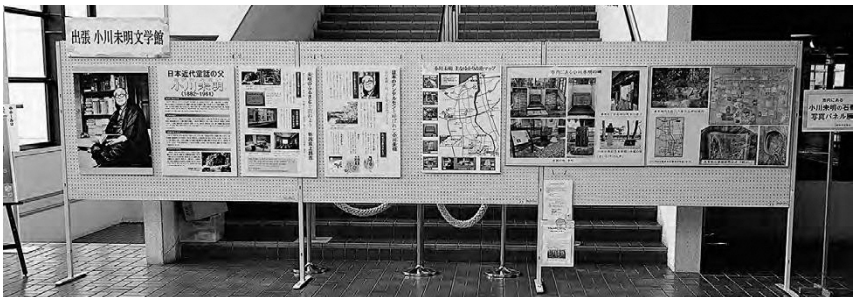
「日本近代童話の父　小川未明顕彰会」合同イベント〈未明童話の世界を感じよう〉

〈日時〉令和6年12月1日（日）
午後0時30分～4時30分
〈会場〉上越文化会館　市民サロン・ロビー

✍「小川未明フェスティバル2024」（上越文化会館主催）の開催にあわせて、「日本近代童話の父　小川未明顕彰会」構成団体による合同イベントを行いました。

当館では「出張小川未明文学館」として、未明紹介パネルの展示や書籍化された過去の小川未明文学賞受賞作品の読書コーナーを開設しました。

また、小川未明研究会（小埜裕二氏代表）によるクリアファイルやTシャツなどの未明オリジナルグッズの限定販売が行われました。未明ボランティアネットワークでは「青いランプ」のパネルシアターと未明童話の手作り小冊子の配布を行い、高田文化協会は市内にある未明関係の石碑の写真パネルを展示しました。



未明ボランティアネットワークの手作り小冊子

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本近代童話の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991（平成3）年に創設され、子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

2024年度で第33回を迎え、639編の作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

第33回小川未明文学賞大賞受賞

黒田 季菜子 さん
大賞作品「ほーちゃんと、旅に出る」

このたびは第33回小川未明文学賞の大賞に選出していただきまして、本当にありがとうございます。

「ほーちゃんと、旅に出る」の登場人物、ほーちゃんの妹の伊吹は予測のつかない兄の行動に翻弄される日々にやや辟易しています。介助者なしに外出や食事のできないマコトさんは、介助を受けてもそれは自分の権利だから「ありがとう」なんて言わないと言います、ほーちゃんは、自分のことを何も話してくれません。

それぞれにそれぞれの考えと立場と主張があります、誰も間違っていない。そういう人達がみんなで集まってひとつのことをしようとしたら、やっぱり大変かしら。そう考えながら去年の夏、パソコンのキイをパタパタ叩き続けました。

ここ数年「多様性」という言葉をよく聞くようになりました。「色々な人達が互いを認めて共存してゆく」という意味のそれが、未来を生きる子ども達にとって更に優しい香りする、善いものを指す言葉になるといいなと思って書いたのが、この「ほーちゃんと、旅に出る」と言ってしまうと、少し大げさかもしれませんが。

さて、ほーちゃん達の旅が、果たして善いものになったのか、それは書き手のわたしにもわかりません。ただこうして大賞に選んでいただいて、ほーちゃん達が本当に広い世界に旅に出ることになったことが、今、本当に嬉しいです。

第34回募集要項

◆募集作品

①短編部門（小学校低学年向け）
…400字詰め原稿用紙20枚～30枚

②長編部門（小学校中学年以上向け）
…400字詰め原稿用紙60枚～120枚

・いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可。

・パソコン等で原稿を作成する場合は、A4用紙を横長に使用。原稿は縦書きで作成。

・表紙に題名、筆名、本名、年齢、職業、性別、郵便番号、住所、電話番号、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記。

・生成系AIのみで作成した作品は応募不可

・原稿用紙2枚程度のあらすじを表紙下に綴じる。

◆応募資格

不問

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参、メール

◆締切

2025年10月31日（金）（当日消印有効）

◆入選作

・大　賞（賞金100万円・記念品）

・優秀賞（賞金20万円・記念品）

＊詳細は小川未明文学館ホームページをご覧いただくか、左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-8601 新潟県上越市木田1-1-3
上越市文化振興課
「小川未明文学賞係」
（「」部分は朱書き）

研修会　大越さとみさんの話　10月22日(火)

今年の研修会では初めて読み聞かせグループ「ワンダーランド代表の大越さとみさん」をお招きしました。プロの話し方を参考に、私達の読み方を振り返る機会となりました。

文学館おはなし会　(毎月第２・第４日曜日　14時～)

未明童話の会　1月26日
【雪だるまとおほしさま】

小さい子どもさんにも喜ばれました。これからも楽しんで聞いてもらえるようにしたいです。

シャーフの会　12月22日
【二度と通らない旅人】

新会員２人の初参加のおはなし会でした。練習を重ねて、もっといろいろなお話を読み聞かせしていきたいです。

特別展おはなし会　10月27日(日)

未明童話の会【赤いろうそくと人魚】

①「赤いろうそくと人魚」　…未明童話の会
②「殿さまの茶わん」　…シャーフの会
③「青い玉と銀色のふえ」　…グループ空
④「月と山うさぎ」　…お話の会うさぎ

「髙村木綿子さんが描く「赤いろうそくと人魚」絵本原画展」の会場で４グループが発表しました。パネルシアターや映像、音楽を用いた朗読で、未明童話の世界を感じ楽しんでもらいました。

未明フェスティバルでの活動　12月１日(日)

市民サロンで「青いランプ」をパネルシアターで演じました。手書きのイラストを描いた未明作品の小冊子プレゼントも好評でした。

出張おはなし会、会員加入の連絡先
上越市文化振興課　上越市木田１-１-３／電話 025-520-5628／FAX 025-520-5853

のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.21

発　行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2025年５月30日

2024年度の活動

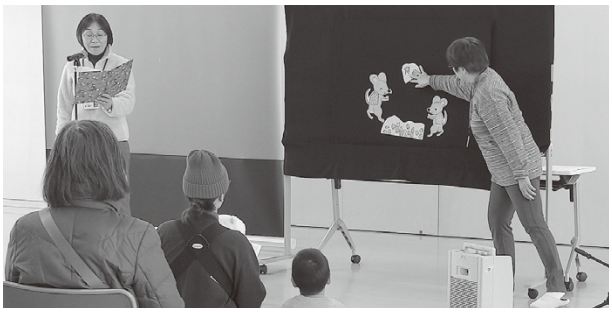
- 小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会 … 全22回、延べ参加者183人
- 出張おはなし会（小学校、放課後児童クラブ）… 24回、897人
- 特別展おはなし会（小川未明文学館市民ギャラリー） … 参加者21人
- 会員の研修会（大越さとみさん）

おはなしジャンボリ“オーレ”　２月23日(日)

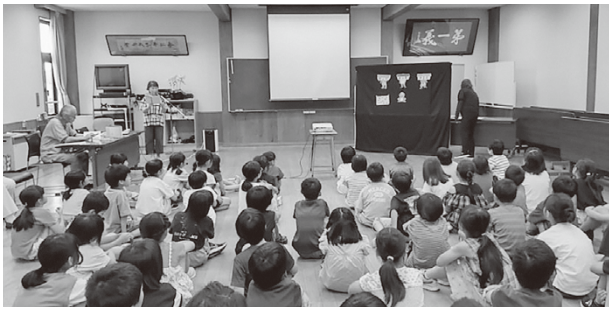
オーレンプラザでのおはなし会に参加して

私達はスタジオで小川未明作「きょうだいののねずみ」「なかないきりぎりす」杉みき子作「雪の一本道」の３作品を演じました。パネルシアターや映像と、ライアーというハープのような楽器のステキな音色に合わせて読み語りをしました。

当日は大雪の中、50人を超す方達が聞いてくださいました。



出張おはなし会



お話の会うさぎ　６月７日　春日小学校

３年生125名を対象に聞いてもらいました。先生方からは「パネルシアターやＯＨＣ等で工夫していただき児童の興味が増し、未明作品への入り口としてもとても効果的でした」という感想をいただきました。

シャーフの会　９月19日　南川小学校

「電信柱と妙な男」「のばら」「王様の感心された話」３作品を映像で楽しみながら興味深く熱心に聞いてもらいました。

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力のお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただけると幸いです。

【主な収集資料】

1．特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2．図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3．参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

令和７年度　小川未明文学館カレンダー

４月	小川未明文学館開館20周年回顧展 （3/22㊏～4/20㊐） 特別展「第33回小川未明文学賞展」 （4/26㊏～5/25㊐）
５～７月	小川未明文学館こども祭　5/10㊏ 童話創作講座　5/25㊐、6/22㊐、7/27㊐ 朗読研修会　6/14㊏、6/21㊏、7/5㊏ 特集展示1「新収蔵品展」（6/27㊎～12/21㊐） 第1回文学館講座　7/6㊐
10月	特別展「日本近代童話の父　小川未明展」（仮称） （会期：10/4㊏～12/14㊐） 第２回文学館講座　10/5㊐ 特別展おはなし会　10/26㊐ 第34回小川未明文学賞募集締切　10/31㊎
11月	第３回文学館講座　11/15㊏
12月	特集展示2「100年前の未明」 （12/26㊎～R8/6/14㊐）
１月	企画展「小川未明フェスティバル・童話感想文コンクール展」（R8/1/23㊎～2月下旬）
３月	第34回小川未明文学賞贈呈式（東京）

未明ボランティアネットワークによるおはなし会
毎月第2・4日曜日の午前11時から文学館にて実施
＊観桜会期間中と1月はお休みします

小川未明文学館　利用案内

◆開館時間
午前10時から午後6時

◆休館日
毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）・祝日の翌日・館内整理日（毎月第3木曜）・資料整理期間・年末年始（12／29～1／3）

◆入館料　無料

◆問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimei-bungakukan/

発行　上越市文化振興課
〒943-8601　新潟県上越市木田1-1-3／TEL. 025-520-5628／FAX. 025-520-5853